

親鸞聖人の  
お念仏

本多弘之

伝道ブックス76

親鸞聖人のお念仏

本多 弘之

表紙デザイン  
H O N  
D E S I G N

## 目次

■ 「行」とは何か	1
■ 念仏を行とすることへの非難	5
■ 願行具足	10
■ 阿弥陀仏の名	15
■ 行ずるときの魔	17
■ 南無・帰命の意味	21
■ なぜ「称名」と書くのか	25
■ 罪の歴史をゼロにできない	29

■ 選択本願の念仏への疑問……………	34
■ 散乱放逸もすてられず……………	39
■ 信じるということに重きを置く……………	45
■ 仏は一人ではない……………	48
■ 愚かな身のままで救われる……………	54

## ■「行」とは何か

親鸞聖人しんらんしょうにんのおつくりになった「正信偈しょうしんげ」の中に、「本願名号正定業ほんがんみょうごうしょうじょうじょうごう」という言葉がございます。

本願名号という言葉については、おそらく親鸞聖人は法然上人の『選せん撰せん本願念仏集』の「本願念仏」という言葉をただかれています。念仏とは、「仏ぶつの御名みなを念ねんずる」行為なわけですが、人間の行為というのは、その行為が何かの目的を伴ったかたちで起こり、そして、その行為をとおして意欲をかたちで具体化したり、表現したりしていくものです。

仏教では行為というものを「行ぎょう」という言葉でも言うわけですが、

「行」はその行為の結果が自分に残ってくる。ですから、よい行為をすれば、そのよい行為をしたことによる結果が、単に一回限りで消えてしまふのではなくて、その行為による何らかの意味、つまり経験が身に付いてくるということです。

例えば野球の選手だったら、ピッチャーは、どういう球を投げたら相手が三振するかということ、訓練して、研究して、身に付けるわけです。いくら背が高くて力がある人間でも、いきなりボールを投げてもうまくはいかないわけです。たくさん訓練して、訓練した結果が身に付いているから、それができるようになる。

マラソンの選手もそうです。どれだけ速く走れる人でも、三十キロま

でしか走ったことのない人が、四十二キロに挑戦すると、三十キロすぎになったら、とたんにスピードが落ちてしまう。やっぱり四十二キロを走っている経験を積まないとできない。

つまり、経験ということは、経験したことの力が、何かしら残っているから、次にやるときに、その力が何かのかたちで出るわけです。新しい経験が身に付くという結果があつて、そして次の経験がまた起こってくるといふものなのです。

仏教でも、この世で生きている間に仏に近づくための行為をする。これを「行」と言います。

行為をして何の功德くどくもなければ、やることの意味がないわけです。



「行」をした人間は何かしらの結果が与えられるということが信じられているから、仏教一般では、行を積んで、その行を積んだ功德によって仏に近づいていこうとするわけです。

行為を積み重ねた結果が身に残ることを「薰習くんじゅう」と言います。「薰かおりが身に付いてくる」ように、行為というのは必ず、身に付くという結果が残ってくる。人間や動物が生きていることは、必ず行為して、行為した結果が身に付いてくるということの繰り返しなのです。

そういうことで、「行」をしたことが消えてしまわずに何か残るといふ信頼があるから、他宗では冬の寒いときに水に打たれる滝行を行ったりするので、水に打たれているときだけ気持ちがよくて、後は何も

なくて消えてしまうのだったら、あんなつらいことはやらないでしょう。やはり、その功德が残って、後に何かいい結果が残ってくると信じているからやるわけでしょう。

行為を繰り返すことによって、どのぐらいの距離があるか分からないけれども、人間から仏への距離を埋めていって、最後はひるがえ翻ひるがえって仏になる。こういうことを信じて行をやっていく。そういう意味で、念仏も一つの行であるわけです。

## ■念仏を行とすることへの非難

浄土の教えが中国に入ってきた四世紀から五世紀ころに、インドの